



画像提供: Europeana <http://www.europeana.eu>

平成23年度
一橋大学附属図書館企画展示

読書のかたち

—読む行為と空間

2011 | 11 | 1 tue — 15 tue

一橋大学附属図書館 公開展示室

開室時間 / 9:30-17:00 (11/3、12、13は閉室)

講演会: 11/8(火) 14:30-16:00
「近世フランスにおける読書の歴史」
長谷川輝夫氏(元上智大学教授)
会場 / 附属図書館 研修セミナールーム

主催 / 一橋大学附属図書館



書物の形態

いわゆる世界最古の「書きもの」は、メソポタミアとエジプトで発見されている。メソポタミアの都市国家ウルクで発見されたウルク文字（紀元前3300～3200年ごろ）は尖筆を粘土板に押し当てた形で出土し、これを原型に紀元前3100年ごろ楔形文字が使われ始めたといわれている。一方で、エジプトで用いられたヒエログリフとその簡略体は、パピルスのうえにインクで書かれることが多かった。パピルスは紙の原料として使用されていた水草の一種で、その内皮はギリシア語でbiblosと呼ばれていた。ここから小冊子や書物の一部を意味するギリシア語bibliaが、続いてラテン語biblia（本、聖書の意）が派生した。ちなみに、ヒエログリフが使用され始めた時期については、ウルク文字と同時期（ないしそれ以前）とする見解と、楔形文字と同時期とする見解がある。

粘土とパピルスの時代に続き、紀元前2世紀になると羊皮紙が考案され、紀元2世紀になると流通が盛んになり始めた。羊皮紙とはその名の通り、羊やヤギの皮をなめして乾燥させ、漂白して作った書写材料である。中世は「羊皮紙の時代」と呼ばれるほど、羊皮紙はヨーロッパで好まれた書写材料であった。その後14世紀から15世紀以降になると、羊皮紙は使い勝手のよい「紙」に取って代わられるようになった。

粘土とパピルスを書写材料として比較した場合、粘土は銘板を作るのに最適で、パピルスは巻物に向いている。粘土板でできた書物とは数枚の銘板を袋か箱に収めたもので、これを決められた順序で取りだして読み進めていったと考えられている。パピルスでできた書物は巻物の形状をし、右手に持たれた卷子体は、読み進むにつれ左手に手渡されていった。銘板による読書ではこれを取り替える動作が読書行為に絶えず差し挟まれ、巻物による読書では読書対象を物理的に一体として実感することができる一方、いったんこれを広げると断続的な読書が困難であった。現在、卷子体で読書をする機会はほとんどないが、巻物で読む感覚は、スクロール操作してパソコン画面上のテキストを読む感覚と似たところもある。

粘土もパピルスも冊子体として綴じるには不向きで、前者は重すぎ、後者はやや脆い。この点で、羊皮紙は冊子体に好都合であり、4世紀のヨーロッパでは羊皮紙が普及し、複数枚の紙を綴じた冊子（本）が作られるようになった。後に羊皮紙は判型の基準となり、これをふたつ折りにしたサイズは二つ折り判folio、さらに折ると四つ折り判



quarto、さらに折ると八つ折り判octavoと呼ばれた。二つ折り判は1ページが約38×30cm、四つ折り判は約30×24cm、八つ折り判は約23×15cmの大きさである。世界的に有名な二つ折り判のひとつに『シェイクスピア戯曲集』*Mr. William Shakespeare's Comedies, histories, & tragedies : Published according to the True Originall Copies* (1623年)があり、英語で「ファースト・フォリオ」First Folioといえはこの二つ折りの初版本を指す。存命中、シェイクスピア(1564～1616年)の作品は個別に出版され、判型としては四つ折り判がほとんどであった。死後出版の「ファースト・フォリオ」は36の戯曲を収録するいわば決定版で、二つ折りという判型からも豪華さが窺える。二つ折り判は気軽に持ち歩ける大きさではないので、おそらく書棚に大切に仕舞われて読書のたび取り出される場合が多かった。これとは逆に、最初に二つ折り判が出た後に、普及版として四つ折り判・八つ折り判が出版される事例もあった。

まったく同じテキストであっても、銘板・卷子物・冊子体・電子テキストで読む経験はそれぞれ異なっている。テキストが書きつけられている物の大きさや形といった書物の形態は、読書行為に影響を与え、テキストの内容を超えて新たな意味を生んでいる。

音読の世界・黙読の世界

今日、読書はひとりで静かに行う場合がほとんどであるが、黙読はヨーロッパで10世紀に至るまで一般的でなく、15～17世紀では音読と黙読は競合関係にあり、以降黙読の比重が高まっていった。ヨーロッパの文献にある黙読の最も古い事例は、アウグスティヌス（354～430年）『告白』Aurelius Augustinus, *Confessionum*（397～398年）第6巻第3章に記されている。ミラノ司教アンブロシウス（340?～397年）は「読書をしているとき、目は紙面を走り精神は文章の意味を探していたが、舌は常に休んでいた。私たちはたびたび彼のもとを訪れたが、彼は常に黙読していた」と驚きとともに司教の読書風景が描写され、彼が音読を避けたのは、隣で朗読を聞いている者に説明をせがまれて、自分の予定している読書量に達しないことを恐れたからであろうと書かれている。

現在私たちの目にするヨーロッパの言語は、たいてい1単語ごとにスペースで区切られている。しかし最初期の読書は音読であったため、各単語は区切られずつながっていても構わなかった。実際、ヒエログリフ・楔形文字・サンスクリットなど初期の文字は、語や文の区切りのない場合がほとんどである。これを「連続記法」という。最古の聖書といわれる3大ギリシア語聖書写本¹（4～5世紀）の時点でも、テキストのなかに一切区切りがない。

その後、7世紀を過ぎると文末に点とダッシュを組み合わせ、行の上部に点が打たれるようになった。9世紀ごろになると、アイルランドの写字生によって、意味のまとまりだけでなく文法的な構成要素によってテキストが区切られ始めた。これを「分かち書き」という。分かち書きの生まれた背景として、この時期にヨーロッパの一部地域でラテン語が「外国語化」した影響が指摘されている。アイルランドの写字生にとってラテン語は日常的に使用している言語ではなく、彼らがその筆写にあたり、原本通りの「連続記法」でなく「分かち書き」を採用し始めたのは理に適っている。当時はたいていテキストを音読して書きとっていたのだが、目で見ただけのものを書き写すならまだしも耳で聞いた「外国語」を書きとることは難しく、写字生の写し間違いが増加していた。対して、9世紀の写本でもフランスのランスでは、語と語の間隔がほとんど分離されていないのは、写字生の日常言語であるロマンス語とラテン語との類縁関係が意識され、読解に困難が少なかったためと推測される。10世紀の後半になると、西ヨーロッパの

写字生の多くが文法学者の品詞分析に倣って「分かち書き」をはじめ、これが安定するのは12世紀といわれている。

とはいえ音読がすぐさま消えたわけではない。一例として、17世紀半ばに登場した英国のコーヒーハウスには新聞や雑誌を読みあげる者とこれを聞く者がおり、書かれた内容について議論を交わすという読書が実践されていた。コーヒーハウスには様々な身分の客が訪れ、各人が思い思いの時間を過ごしていた。店に置かれている新聞や雑誌を静かに読む者、朗読する者と聞く者、議論をする者、おしゃべりに興じる者、たばこを楽しむ者などが同時に店にいた。読み聞かせてくれる者がいるので、文字が読めない者もコーヒーハウスに足を運べば、定期刊行物に書かれた情報を知ることができた。テキストは音声を通じて共有されていたのである。

「分かち書き」のテキストは音読・黙読のどちらにとっても便利である。しかし「連続記法」のテキストを黙読することには困難が伴う。試してみれば分かることだが、「連続記法」のテキストは頭のなかでいったん音声化しないと理解することができないためである。これを疑似体験できるテキストに、レイモン・クノー『地下鉄のザジ』Raymond Queneau, *Zazie dans le métro*（1959年）がある。同作はDoukipudonktan という書き出しで始まるが、この綴りの語はフランス語には存在しないのですぐには意味が分からない。そこで、これを発音した場合の「ドゥキピュドンクタン」に正しい綴りのフランス語表記を与えてみると、*D'où qu'ils puent, donc, tant ?*² というテキストが浮かび上がる。クノーはこうした言葉遊びの要素を、作品中に散りばめた。日本語では、谷川俊太郎『ことばあそび』（1973年）に収録された「かっぱ」という詩がある。「かっぱかっぱらった／かっぱらっぱかっぱらった／とってちった／かっぱなっぱかっぱ／かっぱなっぱいっばかっぱ／かっぺきってくった」というテキストは、単語の切れ目が分かりにくいので、即座に意味を理解することができない。その一方で、意味を問題にせず目にしたままに発音して、促音のリズムを楽しむこともできる。

中世のテクスト

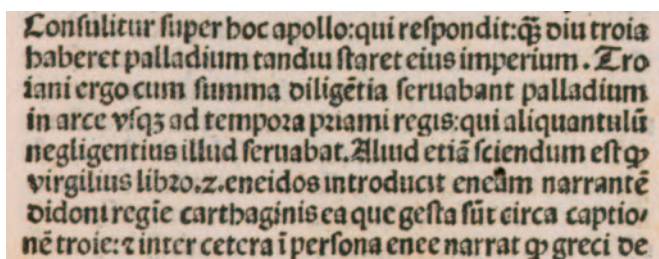
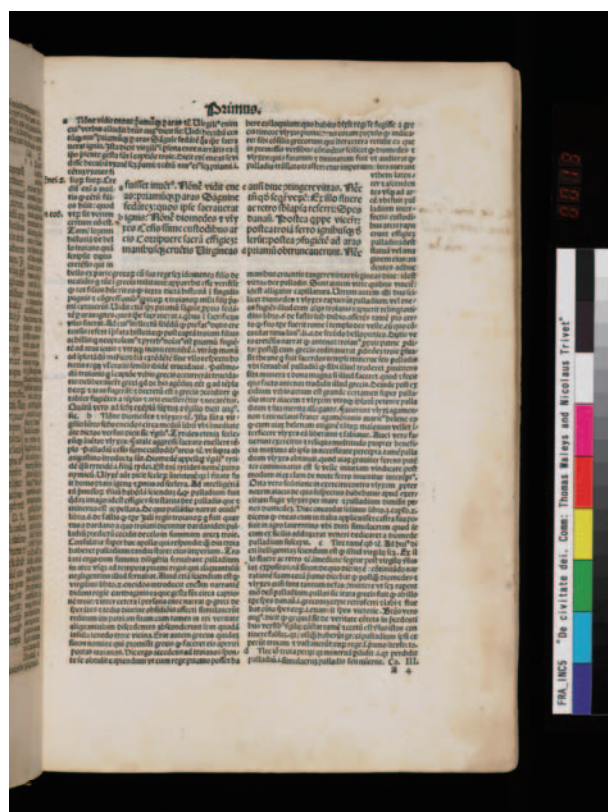
中世初期の読書はおもに修道院内の活動で、聖書は修道士の霊的な糧として音読されていた。写字室ではテクストが読み上げられ、写字生がそれを書きとり写本ができた。写本の生産それ自体が目的化していたというより、書きつけられた聖なる言葉を音声によって蘇らせ、これを自分の手で書き留める行為それ自体に信仰の意味が見出されていたのである。

こうした読書は中世後期に変容を見せ、技巧的な性質が強くなったといわれる。特徴的なのは、注釈・選集・種本・全書・百科事典・用語解説・用語集の存在である。読書は解説と注釈を伴ったテクスト講読へと移行し、教育カリキュラムとして制度化されていった。用語解説や用語集は、読書の際に補助的役割を果たした。また、多くの作品情報を得るため効率的な読書方法が模索され、選集や種本が出回った。時期を同じくして黙読の比重が高まった背景には、音読はたいてい黙読より時間がかかり、かつ必要な箇所を部分的に拾って読むのにそぐわない性質があったと考えられている。本文との関係性でいえば二次的生産物である注釈や選集は普及していき依存が進み、読書に不可欠な媒介物となっていった。注釈等は本文を正確かつ効率よく読むことを意図して生み出されたのだが、物理的に他者の読解が持ち込まれることで読書行為には間接性が加わった。本文の量を超越する注釈が施されたテクストも珍しくなかった。

やがて中世の読書に対して、ルネサンス期の人文学者たちから疑問が呈された。中世の読書では本文が膨大な量の注釈によって歪められ、そのなかに埋没する転倒が起こっている。二次的なテクストに依存するのではなく、本文と読者が一対一で向き合う関係を取り戻すことが主張された。また、中世で主流であったゴシック体は醜いと見なされ、丸みを帯びてラインの細く滑らかな書体として、カロリング小文字体やローマン体が好まれるようになった。ゴシックとは「ゴート人の」「ゴート風の」というのが原義だが、ルネサンス期には「野蛮な」を意味する言葉とされていた。

もうひとつ中世の読書について忘れてはならないのは、彩飾写本の存在であろう。専門の職人によって、挿絵・装飾頭文字・欄外装飾などが色鮮やかに施された写本である。中世では、装飾的な要素の一切ない写本はむしろ少ないといわれている。挿絵はテクストを補助する形でその内容に相応しいものが描かれる場合と、テクストとは厳密

に対応しない場合があった。中世の彩飾写本で数が多いのは、聖務日課書・詩篇・時祷書の随所に挿入された聖母マリアやキリストの細密画で、そのページにあるテクストの内容を補足する挿絵でなくとも、読者の情緒をかき立てる場面が描かれることがあった。装飾頭文字は段落はじめのアルファベットを装飾的な字体で描いたもので、本文の文字より数倍の大きさであった。装飾頭文字はテクストの一部として、その内容を暗示していた。



アウグスティヌス『神の国』(1489/90年)

このテクストの外見は中世的な特徴を有している。テクストは2段組みで、中央寄りで四方を余白で囲まれたわずかな部分が本文で、それ取り囲む大部分が注釈である。しかも注釈の文字サイズは本文よりも小さい。採用されている字体はゴシック体とよばれ、全体的に角張って縦のラインが太く、重厚な印象を与えている。

活版印刷の登場

1440年代、マインツ（現ドイツ）のヨハネス・グーテンベルク Johannes Gutenberg (1398～1488年)によって文字を刻み活字となる金属の角柱、ワイン作り等に使われた圧縮機を改良した印刷用プレス、油を主成分とするインクなど、印刷技術の基本的な道具類が考案された。彼は1450年から1455年にか



印刷工がプレス機を使う様子

けて1ページが42行からなる聖書³を印刷し、そのページをフランクフルトの定期市に出展した。この定期市で『42行聖書』を目にしたアエネアス・シルヴィオ・ピコロミーニ Aeneas Silvius Piccolominiがウィーンのカルヴァハール枢機卿 Cardinal Juan de Carvajalに宛てた書簡(1455.3.12付)には、次のように書かれている。「グーテンベルクという男のなした仕事について、どれほど称賛しても足りないでしょう。印刷された聖書の完全版を見たわけではありませんが、目にした限りでは読むのに何ら支障のない鮮明さで、間違いはひとつもありませんでした」「すでに158部の完全版が印刷されたという者もあれば、180部だとする者もいました。印刷された部数については定かではありませんが、とにかく皆が口をそろえていうことには、テキストの完璧さは疑う余地がありません」「あなたのために1冊買って帰りたいと思っておりますが、難しいかもしれません。というのは、完全版が刷り上がるや否やたちまち売れてしまうのです」。

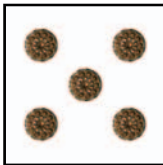
活版印刷には、まず活字が必要である。活字は凸型であるが、最初から金属を凸型に刻むのではなく、アルファベットを凹型に彫って母型を作り、これに金属を流し込んで凸型の父型を鋳造する。アルファベット、コンマやピリオド、数字の活字にくわえ、スペースとなる背の低い金属片も必要になる。活字は活字ケースに整然と収められ、組版工はその前に立ち、手元のステッキと呼ばれる

道具に活字を並べ、数行仕上がるごとにゲラ箱に移していく。ゲラ箱は1ページの組版を作るためのもので、1ページ分が完成すると周囲を紐で縛って固定する。プレス機に組版を置き、まんべんなくインクを塗り、紙を載せてプレスすると1ページが刷り上がる。写本を1ページ仕上げるのとは比べ物にならない速さである。

『42行聖書』を皮切りに、ヨーロッパで1500年までに活版印刷された印刷物は、インキュナブラ incunabulaと呼ばれている。インキュナブラの語源は「揺りかご」を指すラテン語 cunabulaで、そこから転じて「出生地」「はじめ」を意味する。活版印刷の発明によって書物生産は格段に速くなって費用は下がり、テキストの統一性も高まったのだが、写本文化の一切が捨て去られたわけではなかった。初期印刷本には、新しい活版印刷技術と伝統的な写本技術の融合が見られ、むしろ写本を模した側面が強い。『42行聖書』は、テキストの段組み・ゴシック体・装飾頭文字・欄外装飾という特徴を彩飾写本と同じくしており、行間の取り方やハイフネーションが規則的である点を除き、良質の写本とほとんど区別がつかない。書写行為も急になくなったわけではなく、15世紀後半では印刷本を書き写す行為も見受けられた。当時でも書くことは読むことの一環であった。



『42行聖書』「箴言」の第1ページ



再生されるテキスト

いま私たちの知っている最新のテキスト形態は、電子テキストである。このテキストは読書の都度に再生される必要があり、再生装置がなければ読むことができない。再生装置には、パソコンやタブレット端末、スマートフォンなどがある。電子テキストを読む行為は今までにない新しい経験であるが、過去の読書と似たところもある。ウェブページ上にテキストが記述されページ分けのない場合は、テキストの末尾までスクロールさせつつ読むこととなり、これは卷子体を読む感覚との類似点がある。PDFファイルの場合は冊子体で読む感覚に近く、モニター上でページを送って読み進めていく。電子テキストはプリンタに出力して紙媒体に変換しない限り手触りはなく、装置を通じて再生されている間だけ現前する。

電子テキストは再生装置への依存が強くこれに縛られている面もあるが、今までにない自由で読者本位の読書を可能にした面もある。全文検索機能がそのひとつである。ウェブページはもちろん文字情報の埋め込まれたPDFファイルであれば、任意の単語を探してテキスト全体に検索をかけることができる。自分の求めている情報に対して適切にキーワードを選べば効率的な読書が可能であり、ひとつの単語でテキスト全体を横断する間に発見や解釈の糸を見つけるかもしれない。自分の目で検索することも可能だが、精度と効率の点でコンピュータに敵わない。

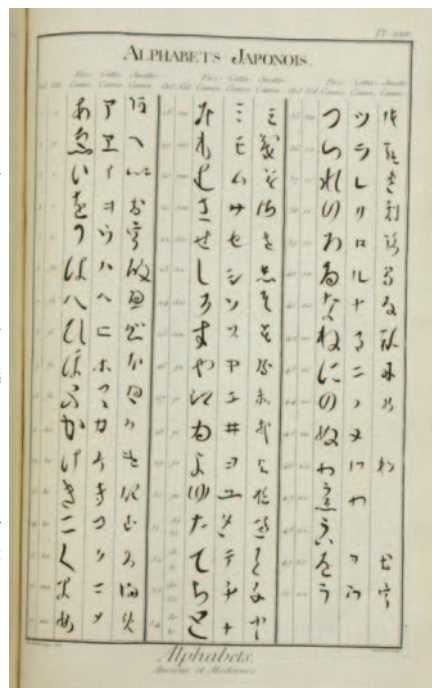
電子テキストによる読書に関し、次のような事例がある。大英図書館では貴重書を電子化し、**Turning the Pages**という独自のソフトウェアで見せているのだが、実装されている機能は実用的で、かつ読書に新しい楽しさを付加している。ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』*Lewis Carroll, Alice's Adventures in Wonderland* (1865年)には、『地下の国のアリス』*Alice's Adventures under Ground*という底本があるのだが、大英図書館はこれを電子化して公開している。**Turning the Pages**を使ってこのテキストを開くと革表紙が現れ、画像をクリックするか、左方向にドラッグするとページがめくれる。いかにも機械的にページが切り替わるのではなく、実際に本を読むときと同じように指でたわませたページが左に移動していく動作が3次元で再現されているのである。作品の本文情報を提供するだけであれば、この3次元のページめくり機能は不要であるが、**Turning the Pages**は、書物を手にしページをめくりながら読み進めていく読書行為そのものを体験できるように

工夫されている。

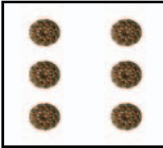
Read (読む) 機能や **Listen** (聞く) 機能も興味深い。**Read** をクリックすると、手書きのテキストを活字化した画面が現れる。判読しづらい箇所があっても**Read**機能が補ってくれるので、テキストが悪筆の場合や、テキストの使用言語を母語としない読者には有効な機能である。対する**Listen** は、テキストを音声化する機能を持っている。

通常の音声読み上げソフトと異なり、実際の人間がテキストを朗読する音声録音されているので、読み間違いや発音の不自然さが一切ない。単純に文字情報を音声情報に置換する以上に、標準的なイギリス英語で朗読を提供してくれる機能である。また、音読という読書行為が埋め込まれているテキストと考えれば、その点でも面白い。

Read 機能を紙媒体の書物に付加するとすれば、本文とそれに伴う二次的なページ (活字・翻訳・解説等) を2段組みにして見せるか、まったく違うページに分けて記述することになり、そのいずれかを選ぶのは著者や出版社であり、電子テキストの場合のように読者が表示・非表示を選ぶことはできない。また**Listen** 機能を書物に付加するとすれば、音声メディアを付録することになるだろうが、やはりテキストと自由に行き来するには不便さが残り、黙読と音読は機会を別にされるのが普通であろう。電子テキストでは本文以外の情報を紐づけるのに向いており、二次的な情報を読者本位で取り出したり仕舞ったりできる。このように電子テキストは新しい可能性を秘めているのだが、見方次第では卷子体のようでも冊子体のようでもあり、再生されている間だけテキストが現前するという意味では音読の世界を連想させる面もある。



『百科全書』図版に描かれた平仮名



変わりゆく大学図書館

読書空間のひとつである図書館は現在、歴史的な変革の時期を迎えている。大学図書館の場合、その変革は1. 本そのものの変化、2. 図書館の空間・スペースの変化、3. 利用者の変化に大別することができる。

<本そのものの変化>

インターネットとともに急速に進んだデジタル化は本の世界にも押し寄せ、E-JournalやE-Bookという新たな形態の書物を生み出した。これらは、紙媒体で出版されていた学術雑誌や図書を電子化し、コンピュータ端末などで読めるようにしたものである。とくにE-Journalの数はインターネットの普及とともに1990年代半ばから急速に増加した。こうした出版環境や利用者のニーズの変化に伴い、大学図書館で扱う資料のなかに占める電子媒体の割合も年々大きくなっている。大学図書館のなかには利用頻度が低い資料や電子媒体で代替できる資料の多くを書庫や館外の保管施設に移し、空いた空間を使って学習スペースなどを拡大しているところもある。

一方で、現存する紙の資料を後世に残すことも図書館の重要な役割である。紙の資料は、保管状態によってはカビやホコリの影響を大きく受け、原型を留めないほど劣化してしまう。そのため、図書館では資料が長期的な保存に耐えうるよう、電子化と並行して保存修復活動に取り組んでいる。一橋大学社会科学古典資料センターでは、専門の修復工房を設け、ページ破れの補修、保革油の塗布、ジャケットの作成、簡易再製本などを行っている。

<図書館の空間・スペースの変化>

時代の変化に伴い、「ラーニング・コモンズ」を備えた大学図書館が増えている。ラーニング・コモンズとは、電子情報資源へのアクセス環境が整い、会話やグループワークが可能で、学生の自律的な学習や活動をサポートする機能を持った大学図書館内の共有空間をいう。1990年代にアメリカで誕生し、情報化の進展や授業形式の変化とともに日本でも導入された。国際基督教大学ミッドレット・トップ・オスマー図書館のスタディエリア、お茶の水女子大学附属図書館のラーニング・コモンズやキャリアカフェなどがその好例である。これらの大学図書館は、単なる知識の伝達の場合から活発な知的交流空間へとその可能性を広げている。

紙の資料を保存する空間も、図書館の膨大な資料の保存・出納・管理等を機械によって行う自動化書庫の登場とともに、様変わりしつつある。自動化書庫は現在、世界で70程あり、その約半数が日本で運用されている。限られたスペースで密度の高い資料保存を行うためには、人間による出納を機械に代行させ、スペースを有効活用するほうが効率的だという考えからその運用が広がった。大学図書館において電子化された資料の利用が増える一方で、紙媒体の資料は今後も生産され続ける。したがって、自動化書庫もやがては狭隘化するであろう。自動化書庫の導入を通過点とし、私たちは今後もこの課題に対する方策を検討していかなければならない。

<利用者の変化>

かつて、大学図書館においては、サービス提供者である職員と利用者である学生の間に絶対的な壁が存在した。近年では、その壁を超えた「学生協働」が注目を集めている。職員の指示に基づいて学生が業務をこなすアルバイトとは異なり、学生協働は学生と職員がアイデアを共有することで新たな図書館サービスや空間を生み出している。

一橋大学附属図書館では、学生サークル「えんのした」のプロデュースにより、かつての事務室が図書館サポーターズルーム「えん」に生まれ変わった。展示室の向かいに位置する「えん」は、古本のリユース（学内循環）と学生がくつろげるオープンスペースの提供を目的とする、新たな読書空間である。「えんのした」は近年、活動の幅を広げ、図書館内での本の紹介や新入生を対象とする図書館ツアーなどに携わっている。



一橋大学附属図書館サポーターズルーム「えん」

■ 注

- 1) ヴァチカン写本・シナイ写本・アレクサンドリア写本の3点。諸記や福音書・書簡等から構成される聖書は、初期キリスト教の時代にはそれぞれが巻物や小冊子の形態で存在していた。今日のような1冊の聖書として現存し最も有名なのが、この3大ギリシア語写本である。ヴァチカン写本は1475年のヴァチカン蔵書目録にはじめて登場し、現在もヴァチカン教皇庁図書館が所蔵している。シナイ写本は1844年にシナイ半島の修道院で発見され、アレクサンドリア写本はアレクサンドリア大主教（在任1602～1624年）によってイギリスにもたらされたためにその名がついた。現在は2点とも、大英図書館が所蔵している。
- 2) 意味は、「どこからあんなに臭うのか」。
- 3) 『42行聖書』『グーテンベルク聖書』の名で知られる。現存するのは48点で、うち12点は羊皮紙に、36点は紙に印刷されている。この48点のなかでも欠落等のない完全版はわずか20点しかない。

■ 画像

表紙 「写字室のジャン・ミエロ」

写字生、翻訳家、執筆家として活躍したジャン・ミエロの仕事風景を描いたもの。書写台の上段には本が広げられ、これを見ながら書写あるいは翻訳をしていると見られる。下段には羊皮紙が広げられている。右手には鷲の羽根でできた鷲ペン、左手にはペンが摩耗したときに削って尖らせるためのペンナイフを持っている。机の脇に付けられた棚に並ぶのは、インク壺である。

Jean Miélot, secrétaire du duc de Bourgogne, traduisant "Les miracles de Notre Dame". Date: 1456, Source: Paris, Bibliothèque nationale de France, Rights: (C) RMN - Agence Bulloz, Provider: Culture.fr/collections; France, URL: <http://www.europeana.eu/>

Page 1

Konstantinos Sp. Staikos, *The Great Libraries: from Antiquity to the Renaissance (3000 B.C. to A.D.1600)*, translated by Timothy Cullen. New Castle: Oak Knoll Press, London: British Library, 2000.

Page 3 アウグスティヌス『神の国』

Augustine, Saint, Bishop of Hippo, 354-430. *De civitate dei. Comm.* Thomas Waleys and Nicolaus Trivet. Venice: [Bonetus Locatellus], for Octavianus Scotus,

18 Feb. 1489/90, URL: <http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/da/handle/123456789/5714>

(一橋大学社会科学古典資料センター所蔵)

Page 4 印刷工がプレス機を使う様子

Engraving of printer using the early Gutenberg letter press during the 15th century. Date: Unknown (estimate 16th - 19th c), Creator: Unknown, Source: artnet.com, URL: <http://www.wikipedia.org/>

『42行聖書』「箴言」の第1ページ

The Gutenberg Bible. Date: [1454, 1455], Creator: Unknown, Description: Mainz, Source: The British Library, The European Library, Provider: The European Library; Europe, URL: <http://www.europeana.eu/>

Page 5 『百科全書』図版に描かれた平仮名

"Alphabets, Anciens et Modernes, Alphabets Japonois," *Encyclopédie, ou, Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers. Recueil de planches, sur les sciences, les arts liberaux, et les art mécaniques, avec leur explication*, vol. 2, 1763.

(一橋大学社会科学古典資料センター所蔵)

Page 7 「活版印刷術」

"Imprimerie, L'Opération d'Imprimer et Plan de la Presse," *Encyclopédie, ou, Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers. Recueil de planches*, vol. 7, 1769.



※本パンフレットに掲載された文章、写真、図版等の著作権は、特記あるものを除いて一橋大学附属図書館に属します。

著作権者からの許諾を得ずに、著作権法の定める範囲を超えて、引用、複写、電子媒体化等を行うことは、禁止されています。

2011年11月1日発行

一橋大学附属図書館

〒186-8602 東京都国立市中2-1

TEL : 042-580-8252/FAX : 042-580-8232